

【報告】

全学教育科目「学問論」の課題設計と成績評価

－大規模統一科目における公平性と妥当性の追求－

串本 剛^{1)*}

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

本稿は、2022年度から始まった全学教育科目「学問論」について、その教育目的を達成するための課題設計と成績評価を中心に報告するものである。「学問論」は2,400名あまりの初年次生に対し、所属学部を問わない学士課程における学問の基本的素養を身につけさせることを目的としている。学生数の多さから便宜的に「コマ分け」を行なっているものの、共通の学修成果を志向することから必然的に、課題はもとより授業全体が統一的に設計されている。しかし、大規模統一科目における公平かつ妥当な成績評価は簡単ではなく、1年目の反省を踏まえて実施してもなお、①不正行為が起きづらい設計の「提出課題」にすること、②アカデミック・ライティングにおける引用に係る採点基準を見直すこと、③協同学習の機会を十分に与えるために最後まで授業参加を促すこと、④AAの成績が真に「特に優秀であるもの」に与えられるようにすること、といった改善すべき点が明らかとなった。これらの改善点が見出された経緯を、本報告では詳細に記録した。

1. 序論

1.1 「学問論」の特徴

全学教育科目「学問論」は、2022年度からの新しいカリキュラムにおいて新規開設された科目で、2,400名を超える全学部一年生に必修として課されている。全学部必修であるからには、学士課程で学修を進めるために所属学部を問わず求められる基本的素養の育成が、「学問論」では目指されるべきである。2021年度までの旧カリキュラムでは、「基礎ゼミ」が同様の役割を担っていたと考えられるが、「基礎ゼミ」は20名前後のクラスにそれぞれ授業担当者があり実質的には100を超える「別科目」で構成されていたのに対し、「学問論」は便宜的に「コマ分け」¹⁾ されてはいるものの、全学生を対象に統一的な授業設計の下で実施されている点に大きな違いがある。

全学部必修の統一科目である点と並ぶもう一つの特徴は、TAやTF²⁾の力を借りながらも、極めて少数の教員で運営していることである。学問論では授業翌日の毎週火曜日に2時間程度の定例会議を開催しており、仮にその会議の参加者を授業担当者と定義すると、2022年度は6名、2023年度は8名が相当する。この人数で一学期の授業を設計・実施し、課題の採点から成

績評価までを担うためには、それなりの工夫を要する。

1.2 課題設計と成績評価

特に本稿が中心的に取り上げる課題設計と成績評価においては、公平性と妥当性を確保するために以下の注意が必要となる。公平性の観点からは、成績評価の結果にセクション（＝形式的な授業担当者）の違いによる不合理な差異が出ないように配慮しなくてはならない。成績評価方法を揃えてシラバスに明記することは当然として、課題の採点に当たっても担当者間の揺らぎをできるだけ抑えるために、採点基準の明確化が求められる。

成績評価の妥当性に関しては、内容と水準の両面から考慮する必要がある（串本 2023）。内容的妥当性は、授業の到達目標、すなわち期待する学修成果に応じた成績評価方法や課題の採点基準によって担保される。「学問論」では授業への参加態度や定期試験等の結果をみる「教室課題」ではなく、授業時間外に各自が行う「提出課題」を重視した課題設計を採用しており、その中で知識・技能・態度といった多様な領域の学修成果の把握を試みている。

授業科目の到達目標やそれを規準とする成績評価の

*）連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 takeshi.kushimoto.e1@tohoku.ac.jp
投稿資格：1

水準的妥当性を検証しようとする時、参照する水準が教育機関を超えて（大抵は専門分野ごとに）一定であると想定される場合と、科目の性格や学生の履修動機によって多様と考える場合とがある。「学問論」を含むいわゆる全学共通教育では後者の立場を採ることが普通で、その際に妥当性の根拠となるのは、単位制度が前提とする標準的な学修時間に他ならない（申本 2021）。この点を念頭に、以下では成績評価の水準的妥当性を確認する。

1.3 報告の手順

以上の背景を踏まえ、本稿では2022年度と2023年度の実績を説明するために第2章および第3章をあて、各章で授業設計を概観した後に課題設計を説明し、成績評価の結果とその反省を述べる。そして第4章にて、2024年度の実施に向けた改革案を提起することとしたい。

2. 2022年度

2.1 授業設計

開講初年度に設定された到達目標は、次の3点であった。

- 1) 「大学で学ぶ」ことの意味と目標を自分なりに見出し、それを説明できる
- 2) 学問や研究に携わることに興味関心と責任感を持ち、主体的かつ協同的に学習している
- 3) データや情報の収集および使用について基本的な知識・技能・態度を習得し、自分の意見を適切に論述することができる

これらを達成するために組まれた全15回の授業内容は、表1のとおりである。6つあるテーマは、教室での受講が任意である講義回と、出欠管理のある演習回から構成された。

受講生はできるだけ所属学部の割合が均等になるよう6つのセクションに分けられ、授業時には各セクションに40名前後の10クラスが設けられた。6つのセクションは、「学問論」の時間割帯である月曜日3～5講時に2つずつ、ただし初回ガイダンスを除き、授業が1週間ずれて進行するA日程とB日程に分けて設定された。これにより、毎週必ず演習回が実施されることになり、TA/TFに勤務時間を毎週均等に提供することが可能となった。

表1. 授業内容（2022年度）

-
1. 授業ガイダンス
 2. 演習オリエンテーション
 3. 大学での学び（講義）
 4. 大学での学び（演習）
 5. 学士課程教育の現在（講義）
 6. 学士課程教育の現在（演習）
 7. 大学教育の歴史（講義）
 8. 大学教育の歴史（演習）
 9. 学問の実際（講義）
 10. 学問の実際（演習）
 11. アカデミック・インテグリティ（講義）
 12. アカデミック・インテグリティ（演習）
 13. 科学技術と社会（講義）
 14. 科学技術と社会（演習）
 15. まとめ
-

2.2 課題設計

2022年度の成績評価は、①テーマ課題【35点分】、②リフレクション課題【35点分】、③アカデミック・ライティング確認テスト（以下、AW確認テスト）【15点分】、④最終レポート【15点分】、という4つの課題の採点結果に基づいて実施した³⁾。演習回に関しては、欠席すると最終成績より1回につき2点の減点とした。ただし新型コロナウイルスの陽性者・濃厚接触者など、やむをえず自宅待機する学生が一定数存在することに鑑み、希望者には追加課題の提出により2点の減点を補う機会を設けた。

2.2.1 隔週課題の概要と採点

テーマ課題は講義回の後、リフレクション課題は演習回の後、いずれも直近の日曜日を締切とした課題であったため、それぞれが隔週の課題となる。隔週課題は1回5点満点、合計で成績の7割を占め、週1回の授業に限らない継続的な学修の動機付けとして設定された。平均点の推移は表2の通りである。

テーマ課題の内容は、講義回の復習や演習回の予習、あるいはそれらの組み合わせで、テーマ担当者が決定したため、回によって平均点に若干のばらつきがある。

課題の提出にはGoogle フォームを使用し、正答の設定ができるテスト機能を使った択一式の問題や、自由記述の問題が出された。自由記述の採点基準は定例会議においてテーマ担当者が説明し、採点は各セッションの担当教員が行った。

一方でリフレクション課題は、次の通り毎回同じ設問とした。

今回のテーマに関する学修（講義の視聴や演習への参加）の中で、最も深く考えさせられた点について記述しなさい。パラグラフ・ライティング（『東北大学レポート指南書』p.10を参照）を意識して話題文を明示し、講義や演習の内容にできる限り具体的に触れながら論じること。【400文字以上】

リフレクションの一次採点は博士課程学生のTAとTFに依頼し、減点があった回答を中心に各セッションの担当教員が確認した上で点数を確定した。

表2. 隔週課題の平均点の推移

テーマ課題	リフレクション課題
第1回後	4.9
第3回後	4.1
第5回後	4.2
第7回後	4.9
第9回後	4.9
第11回後	4.9
第13回後	4.6
第2回後	4.8
第4回後	4.7
第6回後	4.8
第8回後	4.8
第10回後	4.7
第12回後	4.7
第14回後	4.6

2.2.2 期末の課題

期末の課題である最終レポートでは、3つのテーマ、すなわち①東北大学における学習の意義、②日本の大学における学習の意義、③大学における学習の意義、からひとつを選び、1000字程度で論じることを求めた。あえて3つのテーマを区別して提示することにより、選択したテーマの範囲を意識しながら執筆すると共に、選んだテーマがわかるように学生がタイトルを工夫することを期待した。

採点基準には3つの観点を設けた（各5点満点）。第1の観点「体裁」では、3論構成のバランスや文章

表現について採点した。第2の観点「構成」では、序論に主題文があるか、本論を構成するパラグラフに話題文があるか等の点を確認した。第3の観点「引用」では、直接引用と間接引用の有無や書誌情報の十分さを評価した。これらの採点基準や提出方法、質問への対応に関する音声付きスライドを作成し、提出期限（授業最終回直前の日曜日）の約1ヶ月前に公開すると合わせ、後半の演習回において板書で提出期限のリマインドを数回行った。

授業設計の段階では最終レポートの提出を任意にするという案も出されたが、最終的には文字数の目安を少なく設定し採点基準を明確化することで提出を前提とした課題に位置付けたところ、ほとんど全ての学生（未提出者は56名）が提出した。5名の教員⁴⁾が担当クラス分について、共通の基準を参照しながら採点した結果、観点ごとの平均点は、体裁3.6、構成3.5、引用3.3となり、合計での得点率は7割弱となった。観点ごとの採点結果と簡単なコメントを付した全体に対するフィードバック資料を作成し、8月23日に公開した。

2.3 成績評価の結果と反省

図1には、セッションごとの課題別平均得点を示した。全体として、平均点が90点前後、3分の2の学生がAAという結果になった（Dは僅か31名で、履修登録者2,453名に対し1.3%）。またAW確認テストと隔週課題ではほとんど差がないものの、最終レポートについては最大と最低で3点程度の開きがあった。

公平性の観点からこの結果を見た時、まずは期末レポートにおけるセッション間の平均点差が目ざされる。もちろん、レポートの出来具合が反映していたのかもしれないが、他の課題では差が小さいことを考え合わせると、採点基準の共有が不十分であった可能性は否めない。もうひとつの問題は、公平性を重視するあまり、隔週課題の採点基準が「甘め」に寄り、全体の平均点が極端に高くなってしまったことである。400を超えるST比（Student-Teacher Ratio）の授業で毎週丁寧なフィードバックは難しいため、学生が正誤を判断できる採点基準にならざるを得なかった訳だが、結果として科目GPAは、全科目委員会の中で最高の3.5となった（教育情報・評価改善委員会 2022）。

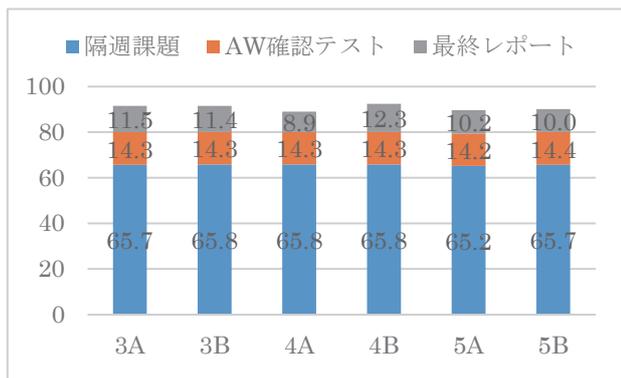


図1. セクション別の成績平均点 (2022年度)

ただし全体的な好成绩は、それだけで常に問題視されるべきではない。大学での成績評価は、成績分布があらかじめ決まっている相対評価ではなく、よくできた学生が多ければその分全体も好成绩となる絶対評価が基本であり、「学問論」においても絶対評価が採用されているからである。そして絶対評価における基準の水準的妥当性は、「学問論」の場合、12節で述べたように学生の学修時間を拠り所として判断するしかない。2単位科目であれば90時間の「学修を必要とする内容をもつて構成することを標準」(大学設置基準第21条2項)とすれば、週あたりの平均学修時間の目安は、授業期間である15で除した6時間となる。学務審議会(2019)には、「到達目標を標準的な水準で達成している」状態がGP(Grade Point)2.0となる「B」の成績に相当すると定められている。つまり典型的には、授業全体として「週平均の学修時間が6時間前後で、GPAが2点台」であれば、成績評価の水準的妥当性を満たしていると思える⁵⁾。しかし教育情報・評価改善委員会(2022)がまとめたところによると、2022年度の「学問論」の実績は週平均3.3時間の学修でGPA3.5であった。したがって、目安を下回る学修量でかなり良好な成績になっていたことは否定できず、成績評価基準が甘すぎたとの誹りは免れない。

他方で、成績評価の内容的妥当性に関しては、アカデミック・ライティングにおける引用が配点上軽視されていた点に改善の余地があった。引用は、目標3)にある「自分の意見を適切に論述」しようとする時に説得力を高めるだけでなく、目標2)で言及されている学問に携わることの責任感に関連して、学習倫理が身につけていることを示す手段でもある。AW確認テスト

では知識としての理解を促したものの、実践する機会は最終レポートのみであり、配点も5点と僅かだった。

3. 2023年度

3.1 授業設計

前年度の反省を踏まえ、2023年度の到達目標は次のように改めた。

- 1) 教育研究機関としての大学および東北大学の特徴を理解する
 - 2) 協同学習と初級アカデミック・ライティングの技術を習得する
 - 3) 自らの知的好奇心を主体的に追求する態度を養う
- このうち2年目の特徴と言えるのは目標3)で、授業の目的である「所属学部を問わず求められる基本的素養の育成」は継承しつつも、各個人が授業内容と自分自身の関心を結びつけることで、学生の学習動機が向上することを期待した。

到達目標の変更に合わせて、授業内容にも手が加えられた(表3。順序はA日程の進行に準ずる)。全15回について少数の授業担当者が企画・実施することは負担が大き過ぎるとの判断から、丸括弧が付されている6回分は学内各所の協力を仰ぐこととなった。

表3. 授業内容 (2023年度)

- | |
|----------------------------|
| 1. ガイダンス |
| 2. 特別セミナー①(教養教育院主催) |
| 3. 特別セミナー②(医学系研究科 押谷仁教授) |
| 4. 【OD】情報探索のススメ(附属図書館提供) |
| 5. 春セミ(学生による模擬授業) |
| 6. 【OD】先輩の経験から学ぶ(既存動画の活用) |
| 7. 私の学問: 中間発表 |
| 8. 【OD】学問と大学 |
| 9. 【演習】学問と大学 |
| 10. 【OD】学問と倫理 |
| 11. 【演習】学問と倫理 |
| 12. 【OD】学問と社会 |
| 13. 【演習】学問と社会 |
| 14. 【OD】挑創カレッジ(TELプログラム提供) |
| 15. 最終回 |

さらに、講義回は基本的にオンデマンド動画【OD】の提供とすることで、同時に稼働するTAの数を抑えセクションを4つ(3A, 3B, 4A, 4B)に減らした。時間割帯は変わらず月曜3～5講時が確保されていたため、5講時には「モヤモヤ会」と題する何でも相談会や、1年生対象のイベント時間帯として活用された。

3.2 課題設計

2年目の課題設計にあたっては、成績評価の公平性と妥当性を高めると同時に、作題と採点の負担を軽減できるよう、論題、提出フォーマットおよび採点基準に極力共通性を持たせるように心がけた。課題は400字以上のパラグラフ・ライティングで、授業期間中は毎週、祝日等で休講の週も含め、16回の提出機会を設けた。

パラグラフ・ライティングの論題は、引用文献の後に付した【資料1】のとおりである。ガイダンス時の練習課題で成績評価の対象とはならない論題0に加え、授業の中盤と終盤で「あなたの知的好奇心の対象と、その魅力について述べなさい」と尋ねる論題を「私の学問」と名づけ、1学期を通じた授業の軸とする予定であった。またその他の週では、「本日の授業に触発された疑問と、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい」という共通の論題を設定し、授業の内容であっても批判的に捉える習慣をつけてもらうことを計画していた。しかし、前者においては知的好奇心の対象が変わらない場合に、また後者においても同じテーマのOD回と演習回では必然的に似た内容のパラグラフとなってしまい、答案の再利用を誘発しかねないということで、授業の後半では毎回異なる論題となった。

提出フォーマットには、前年度同様Google フォームを利用した。前半のセクションで論題を提示しパラグラフを書かせ、そこから話題文を抜き出させた上で、執筆にあたり引用文献を利用したかを尋ねた。「引用あり」の場合は後半のセクションに遷移し、文献の種類(論題2までは図書のみ、その後は雑誌論文も可)と書誌情報の入力を求めた。最後に、引用の有無に関わらず、課題遂行にかかった時間と、匿名での答案公開の是非を問うた。2023年度の「学問論」では、ライティング指導をする他の全学教育科目との関係を念頭

に、授業の到達目標では「初級アカデミック・ライティング」という表現を使っている。これに合わせ課題では、話題文の理解を中心としたパラグラフ・ライティングと、引用の方法および書誌情報の書き方を習得させることに重きを置いた。

課題の採点基準(表4)は、初回授業のガイダンスで学生に示されて以後、毎週の課題返却時にメール本文に記載され繰り返し周知された⁶⁾。400字程度のパラグラフといえども、毎週最大2,400名超の学生の提出物を教員だけで採点するのは不可能である。そこで、課題締切の翌日でもある月曜日の授業時間帯に、TAのうち博士課程後期に在学している4名に担当セクションを与え採点補助を依頼した。採点は0点の基準から順に確認する形で、複数要件がある場合はすべて満たす必要があり、下位基準はすべて上位基準の必要条件とした。したがって例えば、引用文献の書誌情報がすべて正しく入力できていても、パラグラフの途中に意図的な改行がある場合は0点となる。TAの作業では0点から9点までの得点を入力し、セクション主担当の教員4名がTAの採点結果を確認しながら、9点の中から10点に相当するものを選出した。さらに各セクションの採点結果を課題設計担当の教員が最終確認し、締切後最初の金曜日までに期限内提出者全員へメールで得点の通知をするとともに、全体に対するフィードバック資料をClassroomに掲載した⁷⁾。

表4. 採点基準(2023年度)

0点	: 6点の要件を満たしていない、答案の再利用
6点	: 論題に応答、常体記述、400字以上、 改行なし(ブロック引用不可)
7点	: 話題文となる冒頭の一文を正しく認識できている
8点	: 引用文献の書誌情報が全て正しく入力できている
9点	: 引用文が一文一箇所以内、ハーバード方式の適切な引用(出典明示含む)
10点	: 着眼点が特にユニークである

3.3 成績評価の結果と反省

図2に示したのは、最終成績のセクション別平均点である⁸⁾。課題の提出機会が16回であるが、そのうち得点の高かった10回分の合計点そのまま「学問論」

の成績となる。平均点は前年度に比べ10点ほど低下し、セクション間の差は最大3.4点から1.2点に縮まっている。なお、初年度に実施していた演習回の出欠管理は廃止し、演習回後の課題は、出席していた学生しか提出できないものとした⁹⁾。

平均点差の縮小は、公平性の面からは歓迎されるべきだろう。TAによる採点補助の範囲は、リフレクション課題の採点のみだった1年目よりも広がったが、課題設計担当の教員が一元的にTAへの指示と得点通知前の最終確認をしたことが奏功したと考えられる。他方で新たな問題として浮上したのが、おそらくは生成系AIの提案を鵜呑みにしたことによる、架空の文献や文章からの引用である。採点の過程で偶然発覚したのを機にClassroomで注意喚起を呼びかけたところ、7名の学生から述べ13件の架空引用について自己申告があった。また授業終了後に行った調査では、7名12件が発覚した。2,400名超の学生に16回の課題提出機会があったことを考えれば、数としては多くないものの、実際のところ「架空文章」からの引用については把握できておらず、現実的にその把握は困難である。課題で8点以上を取るには引用が必須であり、架空引用は公平性の観点からも看過できない。

成績評価の妥当性に関しても、課題の採点基準における引用の位置付けが強調され、成績平均点も70点台に落ち着いたことで、一定の改善が見られたと言える。ただし9点の採点基準にある「ハーバード方式の適切な引用」は主に形式面での確認にとどまり、内容面の評価は授業終盤、成績の見通しが立ったことで課題の提出率が落ちた段階において漸く着手してきたに過ぎない¹⁰⁾。また成績平均点の適正化は、課題設計の段階では学修時間の増加を伴って実現する構想であった。8点以上の採点基準に引用を関連づけることで、高得点を取るためには文献を探し、読み、引用箇所を選ぶという過程に相応の時間がかかると考えたわけである。実際、引用有無による学修時間と課題得点の推移を示した表5からは、その狙いが達成されたかのように見える。とはいえ、論題5以降では、「引用あり」でも平均学修時間は2時間強でしかなく、引用に関わる一連の行為が、どの程度の密度で実施されていたかは不透明である。

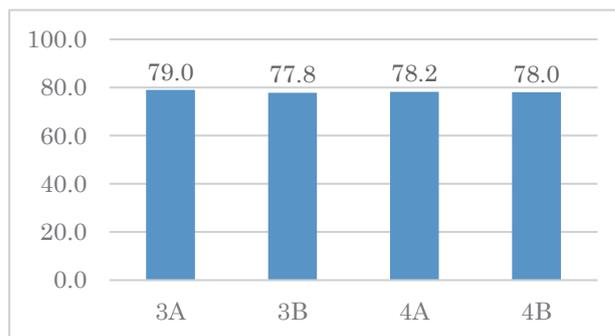


図2. セクション別の成績平均点 (2023年度)

表5. 引用有無による学修時間と課題得点の平均値の違い (セクション3A)

論題	引用なし			引用あり		
	n	時間	得点	n	時間	得点
1.特別 S①	247	1.7	6.8	326	2.7	7.7
2.特別 S②	195	1.6	6.9	388	2.5	8.0
3.新聞_異年	136	2.3	6.9	269	3.0	8.0
4.春セミ	208	1.7	6.8	362	2.4	8.1
5.私の学問	171	1.6	6.9	392	2.2	8.0
6.共有成果	164	1.4	7.0	390	2.2	8.4
7.大学_OD	166	1.6	6.9	376	2.3	8.4
8.大学_演習	134	1.5	6.9	328	2.1	8.5
9.倫理_OD	214	1.5	6.9	359	2.2	8.6
10.倫理_演習	156	1.5	7.0	321	2.2	8.5
11.社会_OD	198	1.6	6.9	351	2.2	8.4
12.社会_演習	108	1.3	7.0	266	2.1	8.4
13.挑創_起業	142	1.6	7.0	210	2.3	8.0
14.私の学問	123	1.3	6.8	164	2.2	8.0
15.共有成果	64	1.2	6.4	77	2.1	7.9
16.新聞_異社	14	2.2	6.0	35	2.4	8.2

注：論題の詳細は【資料1】を参照のこと。

4. 2024年度に向けて

4.1 公平性の追求

すでに前節で論じたとおり、セクション間の平均得点差に関しては、課題設計の一元化で許容範囲に収められる見通しがある。対照的に今後の対策がより重要になると予想されるのが、「提出課題」における不正行為である。生成系AIの登場で深刻化した架空引用に加え、ABふたつの日程を用いる上での宿命である「答案授受」の問題もこれまでに確認されている。

架空引用は単なる注意不足などではなく、実在しない文献や文章を学生が「捏造」していると考えれば、重大な不正行為である。これを防ぐには、初回ガイダンスでの生成系AIに関する注意喚起が求められるものの、根本的な対策をしようとするのであれば、課題での引用を直接引用に限定することが一案となる。ただでさえ架空文献に比べ架空文章は確認が難しい上に、文章の要約を前提とする間接引用を認めると、架空引用の判定はほぼ不可能である。直接引用に限ったからといって実際に全てを点検することはできないとしても、「確認しうる条件」として学生に提示した方が、抑止効果は期待できる。

答案授受に関しては、AB日程制を採用する限り、それを予防する有効な手立てがない、というのが率直なところである。ほぼ同じ内容のパラグラフが異なる学生から提出された事例は、2年目だけで15件確認されている。通常は先行するA日程の学生がB日程の学生に提供するものと考えられるが、そうとは限らない（B日程の学生がA日程の学生に論題を聞いて課題を実施し提供する可能性もある）ため、双方の当該課題を0点とした。AB日程を分けず、3～5講時に約800名のセクションを3つ作ったとしても、教室事情的にはこれまでと同じクラスサイズで演習が実施できる。しかし講義回と演習回が完全交互実施となった場合、講義回の週に大部分のTA/TFは勤務不要となってしまふ。こうした事情を勘案すると、初回ガイダンスで厳重に注意し、発覚した場合には「双方0点」以上の大きなペナルティがあることを周知するよりほかはないと思われる¹¹⁾。

4.2 妥当性の追求

「学問論」の成績評価を妥当性の観点から検討した際、内容的にはアカデミック・ライティングにおける引用の重視、水準的には成績平均点の適正化が進展したと言える。しかし勿論、新たに見直すべき点も明らかとなっている。

内容的妥当性に関連して、引用の適切性を内容面から評価する必要性についてはすでに言及した。散見された不備としては、①引用がなくても説得力が変わらない「不要な引用」、②元の文献とは異なる文脈で引

用している「文脈の切断」が挙げられる。これらを予防するには、例えば「事実の引用」と「意見の引用」を区別させ、後者の場合には著者略歴を添えることを求める方法などがあり得る。

もうひとつ内容的妥当性の観点から指摘できるのは、協同学習の軽視である。「学問論」では初年度より、所属学部混合の演習回において、関心の異なる他者との学び合いが促進されることを重視してきた。しかし2023年度は、課題の提出機会を必要回数以上に用意したため、成績に目処が立った段階で一部の学生が授業から離脱し、後半の演習回の出席率が低くなってしまった。2022年度とは異なり、出席を成績評価で考慮しなかった影響もあろうが、課題提出機会と満点を取るために必要な提出回数のバランスを調整することで、授業参加への継続的な動機づけをする必要がある。

最後に、成績評価基準の水準的妥当性についてであるが、ここでも課題提出機会の頻度は無関係ではない。課題提出機会を16回も用意した意図は、授業の出欠席を含めた自律的な学修を促すことだけでなく、成績に影響しない形成的評価を受ける期間を確保することにもあった。しかし、良い成績を取ろうとする学生は初めから9点を目指して課題に取り組み、9点が10回取れた（AAが確定した）時点で、授業に参加する動機を失った者も少なくないと推察される。本来AAの成績は「特に優秀であるもの」に与えられるべきであり、例えその学生が当初から真面目に課題に取り組んでいたとしても、授業の3分の1を残した段階でAAが確定するのはやや不合理であったと言える。引用の適切性を含め丁寧な採点をするためにも、課題提出機会の頻度を2週に1度程度に減らし、AAを獲るには最後まで十分な学修が求められる設計にすべきかもしれない。

注

- 1) 形式上授業担当者が異なりシラバスが別になっている状態。2022年度は6つ、2023年度は4つにコマ分けされ、2023年度は各コマを「セクション」と呼んだ。
- 2) Teaching Fellowの略で、新カリキュラムと同じく2022年度から導入された。特定の研修を受けた博士課程後期学生やポストドクが対象で、担当できる業務範囲が広く、手当は時給2,000円となりTAの場合の

時給1,500円よりも高く設定されている。

- 3) 学習データの不使用を申し出た19名分のデータは、本節で用いたデータからは除かれている。
- 4) 授業担当者6名のうち、1名は課題採点には関わらなかったことによる。5名のうち1名がTFの協力を得ながら、ふたつのセクション分を採点した。
- 5) 要点は、平均学修時間とGPAとの関係から水準的妥当性を検証することであり、「6時間2点台」はひとつの目安に過ぎない。
- 6) 課題得点通知メールの自動送信システムは、ICT関連の業務を担当する授業担当者の一人によって開発された。
- 7) こうした手続きによっても採点ミスを完全に無くすことは難しいとの判断から、「課題得点に関する問い合わせ窓口」を毎週、原則として得点通知後最初の授業時間帯に設置した。
- 8) 各セクションの標準偏差は、3A=8.9, 3B=11.8, 4A=10.1, 4B=9.0であった。ノンパラメトリック検定(Kruskal-Wallis検定)を行ったところ $p=0.071$ で、セクション間に有意な平均値の差は認められなかった。
- 9) 周知が不徹底だったためか、演習回の出席者よりも課題提出者が多い事態が発生した。そこで課題答案から演習への出席が疑われる場合は0点で得点通知をし、釈明の機会として上記注7)にある窓口を利用した。
- 10) 例えばA日程の課題提出率は、第2週(論題1)では96.1%だったのに対し、第10週で78.8%、最終第17週(論題16)は8.1%にまで落ち込んだ。なお引用の内容面の評価は、論題9の採点から実施した。
- 11) 課題の提出機会が16回もあったため、そのうち1回や2回が0点になったとしても、「痛くも痒くもない」学生が多かったと考えられる。事実、答案授受と認定した19名に申し開きの機会を与えたが、「貸した答案をそのまま提出されるとは思わなかった」と説明に来た学生は1名のみだった。

引用文献

- 学務審議会(2019)「全学教育科目の成績評価等の取り扱いについて」。
- 串本剛(2021)「単位制度の実質化を巡る諸問題：学修成

果の保証に関連して」、『高等教育研究』24, pp. 33-48.

串本剛(2023)「LMSを活用した全学共通教育の質保証：教育目標の水準的妥当性を中心に」、『第71回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究集録』, pp. 72-75.

教育情報・評価改善委員会(2022)「全学教育科目の成績評価結果の概要：令和4年度第1学期」, <https://www2.he.tohoku.ac.jp/center/result/result-distribution-chart-r04-1.pdf> (閲覧2023/8/14, 学内限定サイト)。

【資料1】論題一覧

No.	論題
0	あなたの知的好奇心の対象と、その魅力について述べなさい。【First Draft】
1	特別セミナー①に触発された疑問をひとつ挙げ、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい。
2	前の問いで選んだ疑問* ¹ に対する自分なりの見解を述べなさい。
3	3つの中で最も興味深かった記事* ² に触発された疑問をひとつ挙げ、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい。
4	春セミを通して学んだ内容を踏まえ、あなたの知的好奇心を探究する上での教訓を述べなさい。
5	あなたの知的好奇心の対象と、その魅力について述べなさい。【Second Draft】
6	本日の授業に触発された疑問と、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい。
7	本日の授業に触発された疑問と、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい。
8	本日の授業に触発された疑問と、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい。
9	大学生である自分たちにとって、最も「得」が多くなるような、授業場面における ChatGPT の利用ルールを提案しなさい。
10	「学問と倫理」の演習回では、対立軸に沿った討論や、他者との合意形成（ルールづくり）の議論を行った。その議論の中で、1. 最も悩ましかった「対立する考え」は何か（問い）。2. その対立において、あなたは現時点で、どちらの考えを支持するのか（答え）。3. 支持する理由は何か（論拠）。この3点について、下記に従い、レポートしなさい。
11	もしもあなたが、巨額の研究費を使って優秀な研究者を雇い、技術開発プロジェクトを指揮できる立場にいるとしたら、自身の知的好奇心* ³ に関連する領域で社会変化を起こすために、どのような技術開発を行うか。
12	授業中に描かれた未来像（自班でも他班でも可）の中で、あなたが最も住みたい（あるいは住みたくない）未来像を示し、その理由を論ぜよ。
13	上で選んだ動画* ⁴ の内容に関連して、もっと知りたくなったことについて「問い」を立て、その「問い」を発想した理由や、その「問い」に答えることの意義を論じなさい。
14	あなたの知的好奇心の対象に関連する領域で、在学中に取り組み可能な活動やプロジェクトのアイデアを一つ考え、その意義や期待される成果について述べなさい。
15	提案書* ⁵ の「概要」
16	3つの中で最も興味深かった記事* ⁶ に触発された疑問をひとつ挙げ、その疑問に対する自分なりの見解を述べなさい。

*¹押谷教授から提案があった5つに「その他」を加えた6つの疑問

*²学生自身の知的好奇心に関連した、発行年の異なる新聞記事

*³「自身の知的好奇心」は「教育」に置き換えても良いこととした

*⁴挑創カレッジの起業家リーダー育成（TEL）プログラムが用意した、デザイン思考に関する5つの動画

*⁵論題14の答案を持ち寄り、グループワークを通じて作成したソーシャルビジネスコンテストの提案書

*⁶学生自身の知的好奇心に関連した、新聞社の異なる新聞記事

